

春の伝道礼拝第1回(5月5日)

立ち直りの約束

縣 洋一先生(中野桃園教会牧師)



詩編 第119編28節

ルカによる福音書 第22章31〜34節

「大しくじり」をしたペトロの
「立ち直り」が重要メッセージ

今日の箇所はルカが記す、十字架直前にイエス様が弟子たちのために「祈られた」場面から取り上げました。この祈りで非常に意味深いのは、イエス様が「弟子たちのために祈る」、しかも「何を祈ったのか」その内容までもが記されている点です。

十二弟子の中で印象に残っている弟子と言えばユダとペトロではないでしょうか。二人とも失敗、落語で言う「しくじり」、その中でも「これは本当にまずい」という「大しくじり」をしてしまった。

ユダは、イエス様を銀貨30枚で引き渡した後自死してしまいま

す。もし聖書にこのユダの裏切りのことしか書いていなかったならば、聖書は悲壮感だけの、人間の愚かさ、罪の深さ、重さに打ちのめされてしまう、単なる人間の罪の大きさのみを記す書物になっていたのだと思うのです。しかし聖書の強調点は「ユダ」ではなくて、「ペトロ」なわけです。これは聖書を読むうえで非常に大事なことです。

イエス様を裏切ってしまった。それはユダだけではなくペトロもそうだった。いや、ペトロの方がイエス様を三度も「そんな人は知らない」と否定しているわけですから、ユダよりもひどいと思われることだっただけです。しかし聖書が、そのペトロを追い続け描き続けるのは、まさにそこにある「立ち直り」こそが聖書の重要なメッセージなのであり、失敗ではなく、そこから「何を学び」、どう「立ち上がったか」いったのにかこそ、聖書の関心があることが示されています。

今日の箇所でイエス様は、まさにペトロの裏切りの前に、こう祈ったというのです。

「わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟を力づけてやりなさい。」

弟子のことを思うならば、「苦難に遭わないように」と祈っておむしる当然なものにもかかわらず、「信仰が無くならないように」と祈ったと言っているのです。

この前の所に、「シモン、シモン、サタンはあなたがたを小麦のようにふるいにかけてを神に願って聞き入れられた」という一見良く分からない言葉が記されています。サタンが、信仰があるかどうか、誘惑を用いてふるいにかけてもいいかと神様に許可を申し出たというのです。ヨブ記のようです。「サタン」(アラム語では「サタナー」)は、ヘブライ語で「敵対する者」という意味で、つまり神の行為を疑わせる者のことです。神の恵み深さを疑わせる。「全ては空しい」「全ては無意味だ」と思い込ませ、「虚無」におちいら

せる力がサタンという存在。存在というより力と言った方が合っているかもしれません。であるならば、この「信仰が無くならないように祈った」とは、「あなたが『空しさにおちいらないように』祈った」ということが出来るわけです。

私達は失敗した時、自分で自分を断罪し始めます。自分はなんて愚かな人間なんだと、自分で自分に絶望するという悲惨が始まるわけです。まさにユダがそうだった。そして、「全ては空しい」という言葉に落ち込んでいく。しかしその失望の中でむしろ、「あなたは足場を持つことができる」と聖書は語るのです。なぜならば、そこに主イエスの祈りがあるからです。「空しさにおちいらないようにさせてください」という祈りが、あなたの傍らにある。自分の側ではなくて、向こう側のこの約束にこそ、私達の確かさがあるので

す。主イエスは続けて言われます。「だから、立ち直ったら、兄弟を力づけてあげなさい。」ここに立ち直りが約束されています。

罪のゆるしは「赦」。他者への「共感」「優しさ」につながる。

「罪」というのはギリシヤ語で「的外れ」という意味の言葉です。思い違い、考え違いの時は、その的外れに少しも気づいていないわけです。自分でいくら気を付けていても、知らず知らずのうちに、色んな考えに染まってしまうこともあるし、だからといって、いつも気を張っている事はできない。

気を張れば張るほど罪を犯すことだつて多くなってしまう。その思い違い、考え違いが、様々な問題を引き起こし、行き詰まりを起こしてしまふ。しかし、あることがきっかけで新しい目が開かれた時に、自分の思い違い、考え違いに気づかされる。向きを変えて新しい旅への道が開かれる。その時、その新しい道への一步を踏み出すために、人は「ゆるし」が必要になるのです。

「罪が赦されているのだつたら何をしてもいいのか」という質問があります。聖書はそんな安つぱ

いことを語ってはいません。「罪のゆるし」は許可の「許」ではなくて、「赦」という字を使っています。罪を許可する、そんなことを聖書は語っているのではなく、馬鹿だつた自分に気づき、そこから学んだ時、そこに新しい一步を踏み出すための道が生まれてくる。その旅へと出るために、第一歩を踏み出すために「ゆるし」が必要なのだ。そのためにはある「赦し」なのです。

カール・バルトの『教会教義学』の一節に、こんな言葉があります。「彼は絶えず驚のように翼をはって昇るのである。悩まされてはいるが意気消沈せず、しばしば疲れはするが力を失わず、しばしば悲しみはするが絶望せず…喜びに満ちた旅人―そのようなものとして翼をはって昇るのである。人間の赦免、その義認の完成とは、そのような旅人と定められることであり…このような旅人であることを受け許されるために、彼の罪は赦されているのであって、そのことが、実際に、子としての人間の最高の権利である。」

権利である。」

バルトは「旅人であることを許されるために、彼の罪は赦されているのであって」と語るわけですが、旅人、それは歩き続ける人のことです。「罪の赦し」とは、新しい旅へと歩き続けていくために与えられるものなのです。永遠の命だめには必要なものとして「罪の赦し」がある。新しい一步を踏み出すために、それが「罪の赦し」なのであり、そのための赦しなのです。

そしてそれは「兄弟たちを力づけてあげなさい」と主イエスが言われるように、自らのみにとどまって終わってしまうのではなく、傷を癒された者は、他者の傷をも癒していくものへと、他者への「共感」に、他者への「優しさ」につながるっていくものなのです。主は失敗をも用いて赦しを備えて立ち直らせてくださる方

この大失敗のことを知っているのはペトロだけです。しかしこうやってその失敗談が残っているの

はペトロ自身が人々に伝え広めていったからです。あの失敗があったから今がある。あの失敗を通して、本当に大事なことを知った。「人は何をしたのかでは裁かれない。それはたまたまだから。でもそこで何に気づいたのか。そのことを神は見る。」尊敬する神父さんが教えてくれた言葉です。人間だれしも、失敗を犯します。しかし主はその失敗をも用いて、新しい一步を踏み出す為に「ゆるし」を備え、立ち直らせてくださる方であることを、その約束の言葉から今日知らされるのです。

今日旧約で読んだ詩編もこう歌います。「私の魂は悲しんで涙を流しています。御言葉のとおり、わたしを立ち直らせてください。」「わたしは、あなたのために信仰が無くならないよう祈った。」この「約束」に生かされている者として、私達もまた、立ち直りの旅へとここから一步踏み出して参りましょう。

(出席35名。文責・編集委員会。要約・島野三千代)